



Title	「あいさつの民族誌」：あいさつ言葉の分析
Author(s)	梶原, 景昭
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1978, 4, p. 71-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

あいさつの民族誌

——あいさつ言葉の分析——

梶 原 景 昭

目 次

はじめに

I 調査地の概況

II 「あいさつ」の一般概念

III 北タイのあいさつ言葉

おわりに

「あいさつの民族誌」

——あいさつ言葉の分析——

はじめに

「あいさつ」を行なうことは、他者との出会いが、社会的に容認できるものであると認識することであり、相手との関係を創出したり、維持するうえで積極的な意味をもつものと考えられる¹⁾。本稿では、北タイ農村社会の日常生活において頻繁に用いられるあいさつ言葉を検討し、その分析を試みることにする。同時にそれは、北タイの日常世界の理解²⁾をめざす試みでもある。

日常生活において、人と出会う場合に「あいさつ」³⁾を行なうことはきわめて重要であり、出会いの場面では必ず「あいさつ」がなされる。当該社会の成員の一員にとって、「あいさつ」を行なうことは、その小社会の結合のためにも欠くことのできぬものである。と同時にそれは、実地調査を行なう人類学者にとっても、きわめて重要な問題であり、調査地において、「あいさつ」なしに、調査を行なってゆくことは、まず不可能であると言ってよい。すなわち、被調査社会とのコミュニケーションを円滑なものとするための発端として、「あいさつ」は、まずもって欠くことのできぬものである⁴⁾。

「あいさつ」は、日常生活におけるルーティーンとして、きわめて自明なものであり、通常我々が格別の関心を払う問題ではない。しかしながら、現実の日常生活において、「あいさつ」を満足にできない者は、「あいさつ一つできない。」とか「世間知らず。」と言われ、一人前の存在として相手にしてもらえない。あるいは、対面状況の下での、「あいさつ」を行なう人、行なわない人の区分は、同じ集団に属する人々と、そうでない人、そして友好関係にある人と敵対している人などの間の区分を示すものと言える。このことから、「あいさつ」を行なうことは、ある一つの社会規範を示していたり、社会関係を明らかにするものと言えよう。しかも、「あいさつ」が行なわれるのは、対面的状況においてであり、その状況の集積が日常生活の大きな部分を形造っている。そのため、これまで行なわれてきた、組織や制度の面からの当該社会の理解の方法⁵⁾では脱落してしまう、日常生活の現実を理解するうえで、「あいさつ」の問題が示す可能性は大きいものと考えられる。とくにタイ社会は、「弛緩した」社会構造をもつ社会として、しばしば論及され、そこには単系出自集団などの、社会統合原理を顕著に示す集団、組織、論理が稀薄であるとされた⁶⁾。そのような社会を理解する

場合、組織、制度などの固定した社会構造の研究ではなく、日常のインターアクションとして生起する現象にもとづくダイナミックな理解が、新たな視点を提示するうえで不可欠なものと思われる。

さらに、日常生活において自明であり、かつ没問題である「あいさつ」の問題は、異文化のパースペクティブの中で、きわめて顕著な問題としてたち現れる可能性をもつと言える⁷⁾。我々自身の社会においては、「あいさつ」の重要さには漠然とした認識をもちながらも、あるいは「あいさつ」に関して手痛い経験を蒙ってさえも、自分自身の社会における、きわめて日常茶飯事的な問題として、「あいさつ」が、きわ立って顕著なものとして認識されることが少ない。しかし異文化においては、これらの自明なルーティンでさえ、無意識的な常識として捉えることはできず、当該社会へ参入しようと試みる人々にとっては、末梢的な問題ではなく、むしろ異文化理解の一つの手がりとなる可能性をもつ。

このように、人と人との接触を円滑なものとする「あいさつ」を記述し、分析することによって、常識的な行為の背後に存在する構造的性を示し、「あいさつ」によって何が明らかになるかを検討することが、本稿の主題である。しかしながら、「あいさつ」の一般論を包括的に検討してゆくことは、現在の筆者の手に余るものであるために、ここでは、1976年1月から1977年1月の間、北タイ農村で行なった実地調査⁸⁾にもとずき、とくに日常世界を共有する人々の間に行なわれる「あいさつ」を検討し、コンテキストに即して明らかになるいくつかの点について述べることにする。

I 調査地の概況

本章では、本稿の主題と関連する事項を中心に、調査の行なわれたP村の概況について述べることにする。

P村は、北タイ、チェンマイ県、サンカムペン郡、O地区に属する村⁹⁾で、チェンマイ市の東南25km、チェンマイ盆地の東南のすみに位置する。P村と他の9カ村がO地区（タムボンO）を構成している。P村は1977年1月現在、人口480人、戸数105戸からなる純農村で、水田耕作とタバコ栽培が生業の中心となっている。この村の村長は、O地区の地区長（ガムナン）を兼務しており、そのためP村を訪れる外来者の数は、他の村より多い。

P村は、約9km離れた、サンカムペンの街（郡役所がある）と、2本の未舗装道路によって結ばれている。P村と外界を連絡する交通機関としては、小型トラックの荷台に座席を取り付けた乗合自動車がある。早朝、サンカムペンの街の市場まで往復する便と、朝7時すぎ、チェンマイ市に向かう便があり、その車は、夕方に帰ってくる。そのため日中は、村から街へ行く公共的な交通機関はなく、個人のオートバイか自転車を利用するしか交通の方法

がない。サンカムペンの街からチェンマイ市までの間は、舗装道路で結ばれており、乗合自動車やバスが、早朝から夕方7時頃まで、頻繁に運行されている。

村の人々は、生活物資の多くを、サンカムペンの街やチェンマイ市の市場、ならびに他の隣接したタムボンで開かれる定期市に依存している。とともに、行政的な手続き、農業、金融、医療などの面でも、村とサンカムペン、チェンマイ市とのつながりは深い。村の人々が、サンカムペンの街、あるいはチェンマイ市など村外へ出かける場合を整理すると以下のようになる。

1. 物品の売買

これには、雑貨屋や食料品店を兼業している人々が、毎朝、サンカムペンの市場へ仕入れに行くこと、一般の人々が特別な買物（オートバイ、自転車、家畜、農器具、建築材料、儀礼に用いる品物などを村外で購入すること）に出かけることが含まれる。あるいは、栽培した野菜、染料用の植物、山地で採集したタケノコ、キノコ、飼育した仔牛などを市場に売りに行くことも含まれる。行き先は、チェンマイ市、サンカムペンの街、他地区で開かれる定期市である。

2. 行政手続、農業融資の申込など

通常、郡役所から役人が村を訪れたり、村長が役所まで出向いて村民の手続の代行をすることが多いが、村民自ら出かけることもある。農業金融の融資申込にサンカムペンやチェンマイ市へ行くことも、近年増加してきた。村の人々の中で、特別の役職（たとえばガムナン、その補佐役など）に就いている人は、会議その他で一般の人々よりも村外に出かける機会が多い。

3. 通学のため

P村および、その隣接する村々には、初等学校があるのみで、中等教育を受けるためには、サンカムペンまで行く必要がある。

4. 医療のため

P村には保健所があり、常駐の保健婦による簡単な治療を受けることができるが、人々はチェンマイ市の大病院に行くことが多い。

5. 通勤のため

極く少数ではあるが、P村から毎朝、隣村に設置されているタバコ乾燥所に通う職員、他村ならびにチェンマイ市の学校に行く教員がいる。

6. 余暇、遊興などのため

主として若い世代がチェンマイ市に遊びに行き、映画を見たり、街をぶらつく。また村外に居住する親族を訪問することもある。さらに、近年盛んになったヴィレッジ・スカウト¹⁰⁾の集会への参加、村外で行なわれる大きな儀礼への参加も、一応この範疇に含まれるものと

する。

このように、P村と、その村外の地域との結びつきは、さまざまな形をとるが、P村の属するO地区、サンカムベンの街、チェンマイ市との関係が、とくに密接であり、同一タムボン内の他村との関係以外は、街や市と、きわめて線的なつながりを持ち、その途中の村々との関係は一般に稀薄である。

P村は、一つの行政的に独立した村として、あるいは、いわゆる「おらが村意識」¹¹⁾によって、まとまりのある一体性をもってはいるが、タムボンを同じくする他の村々との結びつきも強く、決して孤立的な村落ではない。中部タイでは、一つの村に一つのワット（仏教寺院）と一般にいわれているが、北タイでは、一つのワットに日常の食事贈与を行ない、そのワットにおける儀礼に参加するのは、2つの村の人々であることが多い。P村もその例外ではない。葬式組の成員も、P村の人々を中心とするが、他村の人々も加わっている。また灌漑水路の補修を行なう、灌漑グループ¹²⁾の成員も、数カ村の住民から構成されている。水田所有に関しても、P村の住民は、必ずしもP村の境域内にのみ、水田を所有しているわけではなく、他村の境域内にも所有していることが決して少なくないといえる。逆に、P村の境域内にも、他村の人々の所有になる水田が存在する。小学校も、P村とその隣村とが共同で利用している。ワットや学校を2つの村が共同利用していることから、その2つの村の関係（本村と分村）が注目されるが村同士の系譜関係が強調されることはなく、ここでは、行政的に区切られた、現在の村落を一つの単位として考えておく。

このような村の境界を超える人間関係ないし社会関係の拡がりの一つの理由として、婚姻と居住形態に注目する必要がある。P村で現存する夫婦の組合せのうち、40%は、夫婦双方ともP村の出身者であり、さらに40%が、夫が他村の出身、妻はP村出身（夫の70%は同一タムボン内の他村より婚入）、そして16%が、妻が他村出身（妻の殆んどが同一タムボン内の他村出身）となっている。結婚直後の居住は、その殆んどが妻方の両親の家での同居の形をとる。その後数年して（妻の妹が結婚する頃）、妻方の両親の家の屋敷地の中に余地があればそこに、ない場合でも、多くは妻の出身村内に、家を建て、独立して居住する傾向が強い。相続は均分であり（死後相続）、かつ男女の性差なく行なわれるために、男性の場合、自分の両親から相続した水田を、自分の出身村内に保有し、彼の妻は、彼女の両親から相続した水田を、自分の出身村内にもっていることがめずらしくない。このような伝統的な婚姻、居住形態は、最近では若干の変化の気配がみられるとしても、依然として根強いものである。

村の人々が村外へ出かけて行く形態について、さきに述べたが、それらは原則として日帰りの範囲に限られる。この村では、東北タイの諸村と比較して、大都市へ出稼ぎに行くことがきわめて少ない。私の滞在中、そのように長期間村外で働いている事例は2例のみであ

った。また、近隣の小都市で働らき、週末、あるいは月に一度くらいの割合で村に帰ってくる例は1例、師範学校在学のため、チェンマイ市に寄宿しているもの2名、僧修行のため近隣の小都市のワットに滞在するもの1名であった。

一方、村外からP村を訪れる人々は、P村に水田を保有する隣村の人々、親族や友人を訪問に来た人々、ガムナンに相談に来たり、用事で訪れた近隣の村の人々と、郡役所の役人（土地課、農業課など）、県会議員（小まめに村民の世話をやくと同時に、道路工事などのための臨時の労働力の調達を行なう）、行商人（家具、家畜、食物、衣類、灯油、薬品などを扱い、自転車にニワトリを積んでやって来る小規模なものから、大型バスで、映画上映の余興付きで乗り込む菓屋までさまざまである。）など、やや遠隔地からやって来る人々とに分けられる。さらに近年強まってきた傾向として、村で行なわれる大規模な仏教儀礼に、チェンマイ市やバンコク市から団体で参加する人々も多い¹³⁾。

P村の居住区域は、河川で大きく2つに区切られている。双方とも行政的にはP村に属すが、村の人々は、河向うの小さな区域（13戸からなる）を *baan nai*（内側の村）と呼び、大きな区域を *baan P*（P村）と呼ぶ。*nai* とは、字義上、内側とか中を指す言葉であるが、街（*muang*）を原点として考えると *baan nai*は、もっとも遠い外側の領域に位置している¹⁴⁾。さらに、*baan P*は、車の通行可能な道路（村のメイン・ストリート）によって2つに区切られている。このように居住区域を *baan* と呼ぶのに対し、水田は *ton* と呼ばれ、畑は *suan* と呼ばれている。P村は、村の東南、山地と接しているが、畑地がおわって山の斜面が始まる傾斜地を *phe*、山を *doi* 谷を *huay* と人々は呼んでいる。あるいは、村里を *baan*、人間の居住していない森、山、谷の全体を *paa* と呼ぶ。これらの用語は村をとりまく大まかな空間の範疇を示している。方位、方角は、東西南北によって示されるとともに、話者の位置に依拠して、きわめて相対的に、*pun*（あちら）と *phoe*（こちら）とに区分されている。

P村で話されている言語は、北タイ語（*kham muang*）¹⁵⁾である。義務教育¹⁶⁾の普及により、学校教育は原則として標準語（バンコク方言）を使用して行なわれているが、家庭では、現在でも北タイ語が用いられている。北タイ語はまずもって話し言葉であることに注目しなくてはならない。すなわち、北タイ文字は、伝統的に、また現在も僧院（ワット）でのみ教えられるために、僧経験をもつ人だけが、その読み書きを習得している。そのため、僧経験のない人々にとっては、標準的なタイ文字が唯一の書きことばの媒体として用いられており、しかもそれは、標準語にもとづく話し言葉とともに義務教育として教えられるために、書き言葉のレベルとして、北タイ語は劣勢である。しかしながら、日常会話には殆んど北タイ語が使用され、北タイ人としての一体感が強調されている。

北タイ語と標準語との差違は、とくに語累レベルで顕著であり、笑い話の恰好の材料とな

る。北タイの社会では、冗談や気の利いた会話に対する感受性は豊かで、伝統的な求愛の方法、あるいは演芸などにおいて、言語遊び、即興性が顕著にみられる¹⁷⁾。今日では、義務教育の徹底化、バンコクを中心とする都市文化との接触（ラジオ、映画などの影響）により、それらの伝統はややうすれつつある。

この村の生業は農業であることはすでに述べた。自家消費用の米作と現金収入のためのタバコ耕作を、殆どどの農家が行なっている。とともに、使役動物として牛、水牛を飼うこともひろく行なわれている。が、水田耕作農村といっても、P村の地理的環境から、この村と山や森との結びつきは強い。炊事用の薪や山菜を採るために人々はしばしば山へ出かける。垣根や家の普請に用いる竹をとり、あるいは狩猟に出かけること、家畜を山に移牧することも行なわれる。

北タイでは、自足的かつ快適な生活を示すイディオムとして、*u dii kin dii*（字句上「快適に暮らし、食物も豊富である。」の意）という語句がしばしば用いられる。あるいは、季節（雨期と乾期とに大きく二分される）によって、*khong kin maak*（食物が豊富）か否かに関する言及が行なわれる。主食であるカウ・ヌン（もち米の蒸したもの）や、ラープ（牛、水牛、豚その他獣肉のたたき、タルタルステーキ風のもの）は、とくに北タイ独特の食物として（実際には、東北タイにおいても、もち米が主食であり、ラープも供されるが）喧伝され、北タイ文化の一体性を示すものと言われる。食事は、普通、カウ・ヌンを主食として、それに一品のオカズがつく。オカズの内容は、*keng*（肉や魚の入った、唐辛子入スープ）、*tom*（うす味のスープ）、*nam prik*（唐辛子入のペースト）、その他 *plaa khem*（塩干魚）の焼いたもの、炒めたものなどさまざまであるが、蛋白源としては、畜肉、鶏卵、魚など市場や村内の店で購入されるものの他に、野性動物の肉（狩の獲物）、小魚、カニ、カエル（水田や河川で捕獲したもの）、数種の昆虫、ヘビ、ネズミ、トカゲなどがある。とくに、自ら捕獲した動物は蛋白源として珍重され、もっとも美味なものと考えられている。自分の家で飼育している家畜を殺して食用に供することは殆んどなく、とりわけ儀礼および祝宴に用いられる牛や水牛は、必ずしもその家から、ないしは市場で購入される。

村のメイン・ストリートを朝一番に通るのは、街の市場へ買出しに行く人々を乗せた乗合自動車で、約9km離れたサンカムペンの市場まで行き、午前6時頃村へ帰ってくる。その車が着くと、朝食の買い物のために、村の雑貨屋へ行く人々が往来し始める。やがて7時になると、街の学校へ通う学童の自転車が通りすぎ、街へ向かう乗合自動車が出発する。8時前になると、村の学校へ通う小学生、隣村のタバコ乾燥所へ通う人々が通る。そしてその後、農作業へ行く人、家畜を放牧に連れて行く人々が、村のメイン・ストリートを往来する。農繁期には、殆どどの人々が、田畑に出かけてしまい、村内は夕方まで静まりかえる。午後3時頃には小学生が授業を終え帰宅し、家のまわりで遊び始め、夕方5時頃には、田畑での仕

事を終えた人々が再び往来する。朝、街に向った乗合自動車も村に戻り、夕食の買物に行く人や、用事でよその家を訪れる人々が、メイン・ストリートを行き交う。やがて陽がおちて夕食が済むと、映画や拳闘など特別の催し物がない限り、人々の往来は途切れる。夜になって村の中を歩きまわるのは、若い娘のいる家々を訪れる若者だけとなる。

II 「あいさつ」の一般概念

ここで行なう、「あいさつ」の一般概念の検討は、あくまで本稿の主題と関連する範囲に限定され、したがって、一般概念を通文化的なレベルから徹底して探求するものではない。その結果、この検討は、北タイの「あいさつ」の輪郭と特徴を示すためのものと位置付けられる。

次章でのあいさつ言葉の分析を行なう準備として、以下いくつかの基準にしたがい、考察をすすめてゆくこととする。

1. 出会いの「あいさつ」と別れの「あいさつ」

通常、「あいさつ」の行なわれる場面として、出会いの場と、別れの場とが考えられる。人と人のインターアクションが行なわれる場面を、i) 開始, ii) 中間, iii) 終了の三つの局面に区分すると、i) と iii) の局面において「あいさつ」が行なわれることが了解される。i) の局面で行なわれる「あいさつ」は、交渉のない状態から、交渉、対話の状況への移行を円滑に、抵抗なく遂行させる機能をもつものと言える。iii) の局面での「あいさつ」は、i) とは逆に、それまで続いていた交渉、対話の状況を終息させ、無交渉の状態への移行を円滑なものとするために、さらには、交渉がその場限りの一回性のものではなく、継続的な関係の設立、維持の糸口となるように行なわれるものである。i) と iii) の局面はいずれも、インターアクションの境界的な局面として考えることができる。すなわち、沈黙¹⁸⁾→対話→沈黙という流れの中にインターアクションを位置付けると、「あいさつ」は、沈黙から対話へと、対話から沈黙への境界で行なわれ、それぞれの移行を円滑なものとする機能をもつと言えよう¹⁹⁾。

2. 個人的・私的な「あいさつ」と、集团的・公的な「あいさつ」

「あいさつ」がなされる場面を、路上で複数の人間が出会う際と、結婚式、葬式、その他の会合などの場とに大別し、「あいさつ」をそれぞれの場に適合的な二種に区分することができる。すなわち、日常の個人的なインターアクションの場で行なわれるものと、集团的・公的な場でなされるものとが考えられる。いずれの場合も、あいさつ言葉はパターン化されたものであるが、とりわけ公的・集团的な場で用いられるあいさつ言葉には、決まり文句（慶弔に応じてさまざまであるが）が不可欠であり、そこではあいさつ言葉のもつ詩的機

能²⁰⁾が強調される。一方、私的・個人的な出会いの場で用いられるあいさつ言葉では、言葉そのものの意味ではなく、「あいさつ」の有無や、あいさつ言葉の phatic²¹⁾な機能が強調される。

3. 既知の相手に対する「あいさつ」と、未知の相手に対する「あいさつ」

これら二種類の「あいさつ」の間には、フォーマリティとインフォーマリティの区分がみられる。日本語における「はじめまして。」や、英語の 'How do you do?' は初対面の相手に対して必ずといってよい程に用いられる。それに対し、既知の間柄では、そのような「あいさつ」はまず行なわれることがなく、前夜のどしゃ降りの雨のことが、「あいさつ」の話題とされたり、あるいは身体表現においても、たとえば日本の場合、丁寧なお辞儀ではなしに、軽い会釈をしたり、手をちょっと上げて合図したりすることが行なわれる。

「あいさつ」の機能の一つとして、探索的なものがある。これには言語レベルのみでなく、「あいさつ」を行なうと同時に、相手の人相、風体をながめることも含まれている。この探索によって、これから行なわれるインターアクションに適わしい話題を選択したり、あるいは相手をどのように位置付けるか、そして、相手の気分を推量することが行なわれる。この機能は初対面の相手に向けて発揮されるものであり（あるいは既知ではあっても地位や身分差の顕著な相手の場合に行なわれる。社長の顔色をうかがうことなど）、既知の相手の場合には、この機能は後退し、これまでに既に知っている相手に関する知識、相手との共同体験を再確認して、相互関係を維持してゆくことが、「あいさつ」の主要な機能となる。

ただし、「あいさつ」をめぐるフォーマリティの問題には注意すべき点が見出される。仮りに未知の者同士でも、何らかの共同体験（「ここ」と「いま」のような時空を共にする体験）を分かち合う人々の間では、インターアクションの開始の局面にみられるフォーマリティは一時的に消滅し、通常の場合にみられる一定の過程にもとづく「あいさつ」は行なわれない。たとえば、山登りの場合を考えてみればよい。山道で出会った人に対して、いきなり「はじめまして。」と言うことは、いくら相手が初対面の人でも、ほぼ例外なくありえない。このような場面では、「今日は。」とか、天候に関する「あいさつ」、あるいは「頂上まであとどの位かかりますか。」などの、その場の行為に直接結びつくトピックがまず話される。あるいは、飛行機に乗り合わせて、乱気流に遭遇した場合を想定してもよい。その場合にも、それまでは口をきかなかった初対面の、隣り同士に坐り合わせた人々が、突然冗舌になることがめずらしくない。両者がまさに体験した乱気流がまず話題となり、それに関連して話が拡がってゆく（「そういえば、以前この路線に乗ったときにも、たしかひどいのに出会って…。」）。そしてそのあとで、ややあらたまって自己紹介が行なわれる（「実は私はこういう者で…。はじめまして。」）。

さて本稿で、既知の相手というのは、原則的には一つのスピーチ・コミュニティ²²⁾を形成

する人々のことを指す。すなわち、郡役所の役人、チェンマイ市在住の人びとなど、顔を見知っていたり、言葉を交わした経験があったとしても、出身地域が違っていたり（方言の差異）、あるいは社会的な地位の差（生活様式の差異）により、同一スピーチの体系を用いることのない人々は、その範疇には含まれない。既知の相手に対する「あいさつ」が用いられる対象は、まず、現在同じ村に居住する人々であり、現在は他の場所に居住していてもかつてはその村に住んでいたたり、そこで生まれた人々、あるいは、さまざまな関係で密接に結びついた同一タムボン内の他村の人々などである。家族内（同居家族）でこれらの「あいさつ」が行なわれることは稀であり、その範囲をこえる親族（同じ屋敷地に居住している親族の場合「あいさつ」の対象となることはない）、隣人、友人が「あいさつ」の対象とされる。とくに、村外の人々の範囲は必ずしも固定的ではなく、いわゆる自己中心的(ego-centric)に決定され、各個人によって、「あいさつ」の対象となる人々の範囲には多少のズレがみられる。

4. 言語表現と身体表現

一般に「あいさつ」を言語表現と身体表現の複合とみなし、それら二つのレベルから検討することは妥当であろう。多くの場合、お辞儀、会釈、合掌、握手、キス、抱擁などの身体表現が、言語表現とともに用いられる。相手が、既知であるか、未知であるかによって、フォーマルか否かの区分が身体表現にも現われる。どちらが先に握手の手をさし出すか、お辞儀が深いか浅いか、手の甲にキスする、頬にキスするか等々の問題は、社会的地位、性、年齢、親しさ、フォーマリティなどを端的に物語るものといえる。

5. 「あいさつ」の形式

あいさつ言葉の形式を、i) 疑問形、ii) 感嘆形、iii) 肯定形に三分することができる。日本語を例にとると、「お出かけですか。」「あら。」あるいは「まあ、お久しぶりで。」、そして「お早よう。」「今日は。」などが、それぞれ i) ~ iii) にあたる。英語では、それぞれ、‘How are you ?’, ‘Hello !’ あるいは ‘Hi !’, そして ‘Good morning.’ が、それらの例となる。これらの形式による区分は一つの目安であり、疑問形であるからといって、必ずしも字義通りに疑問を呈するものとはいえない。雨がどしゃぶりであっても、‘Good morning.’ が朝の「あいさつ」として用いられるという、「あいさつ」と、その意味内容（伝達内容）との関係をめぐる問題も存在する。上の例からも了解されるように、「あいさつ」は一般的に、きわめて形式化されている。‘How are you ?’ は必ずしも健康状態のみを訊ねる質問ではないし、それに対して、現在の自分の健康状態にもとずいて正確な回答を行なう必要もない。むしろ定式的な問いに対し、定式的な回答を行なうことで「あいさつ」が行なわれる。あるいは、対面状況にある二者が、ほぼ同時に ‘How are you ?’ と訊ね合い、どちらも回答しないで通り過ぎて行ったり、すぐさま次の話題に話が進んで行くことも

ある。‘Hello !’ や「やあ。」も字句上の意味が実際に問題とされることはない。このことから、「あいさつ」を行なうことは、必ずしも字句上の意味内容を伝達することではなく、その応答の状況に依拠して、個々人の感情をも含め、あるメッセージが伝達されるものと考えられる。

6. 「あいさつ」の話題

「あいさつ」が行なわれる際に媒体となる話題（あいさつ言葉の）を以下のように区分することができる。i) 自己志向的 (self-oriented), ii) 他者志向的 (other-oriented), iii) 中立的 (neutral) と分類される。歩き疲れているときに、路上で友人と出会った際に、「いやあ、まいったよ。」と呼びかける場合、それは i) にあたり、その際友人の方が、ふらつく足どりを見て、「一体どうしたの。」と訊ねれば、それは ii) と考えられる。出会いに参加している双方に直接関連しない話題を皮切りとして、インターアクションが開始されれば、それは iii) の例となる。たとえば天候に関する「あいさつ」などは iii) の例であろう。

また話題を、i) 過去に関するもの、ii) 現在に関するもの、iii) 未来に関するものの三つに分類することもできよう。天候を例にとると、「夕べはひどい雷だった。」は i) に、「実に良い天気だ。」は ii) に、「雨が降るぞ。」は iii) にそれぞれあてはまる。

さて、ここで、「あいさつ」の一般概念を一応整理してみると次のようになる。すなわち、「あいさつ」とは、あくまでも対面的な状況のもとで、二者間（必ずしも人数が二人と限定されるのではない）で行なわれる、定式化された、比較的単純な言語と非言語行為の組み合わせのやりとりである。そしてそれは、相手の注意を惹き、相手を社会関係のうちに位置付け、他者との接触をめぐる不確実さや不安を解消する機能をはたす。と同時に、邂逅の始めと終わりを区切り、秩序付けを行なうものでもある。

III 北タイのあいさつ言葉

北タイ語には、「あいさつ」の一般概念を示す用語は存在しない。そのため、ここでは前章で示した、「あいさつ」の定義にもとずき、北タイ社会における「あいさつ」を概観し、つぎに、日常のインターアクションのうちに生起する「あいさつ」を中心に、その記述と分析を行なうこととする²³⁾。

前章で述べた、公的・集团的、私的・個別的という区分にしたがって、各々の「あいさつ」の範疇の具体的な内容について、まず述べることにする。

はじめに、公的・集团的な「あいさつ」を、それが行なわれる「場」について考察すると、それらはいずれも、顕在的な儀礼の場、あるいは、所与のものとしての儀礼や会合の場²⁴⁾であることが了解される。すなわち、このような「あいさつ」が行なわれるのは、仏教

儀礼、結婚式、選挙演説会、その他の各種会合、催し物、村の長老への表敬などの場においてである。

あらゆる仏教儀礼の機会において、一般人は、仏・法・僧の仏教における三宝に対して、儀礼の始まりと終わりの局面において、「あいさつ」を行なう。これらは、定式化された、パーリ語の経文とワイ（合掌）からなりたっている。つぎに、仏教祝日に行なわれる儀礼や、とくに大規模な儀礼の場合に、一般人が、他の一般人に対して「あいさつ」を行なうことが考えられる。たとえば、ワン・カウ・パンサー（僧の特別修行期間幕開けの日）の儀礼が行なわれる際、ワットの本堂に集まった会衆に対し、村長があいさつを行ない、同時に、村の行政、農業など、村の生活にかかわる問題について報告することがある。あるいは、県会議員、国会議員等々の選挙期間に開かれる大規模な儀礼の場では、立候補者のあいさつがなされることが多い。またワットの建立や補修の募金を目的とする儀礼では、とくに村外から数多くの参集者（寄附をする人々でもある）がある場合、村の代表者から、歓迎の辞（*kham rap long* あるいは *kham rap kheek*）と感謝の詞が捧げられ、村外からの参加者の側からのあいさつと、村民の歓迎への返礼が表明される。さらに、仏教祝日で、特別な、僧のための儀礼が行なわれる際には、僧同士（とくに年長で、管区長など上位の僧に対し、下位の僧からの）の間に、あいさつ（*kharawa* 表敬）がなされる。学校の新築校舎開き、橋の渡り初めなどの大規模な行事においても、その中心をなす仏教儀礼とともに、開会、閉会のあいさつ、来賓のあいさつが行なわれる。

村の長老への表敬のあいさつは、新年や仏教祝日に行なわれ（*kharawa* あるいは *dam hua*）、長老へプレゼントが贈られ、それに対し、長老の側からの祝福が与えられる。結婚式の場合、近年は、仏教儀礼として行なわれることが多くなってきており、その場合、上述の、三宝へのあいさつと、来賓の祝辞、主催者のあいさつが行なわれるが、伝統的な結婚式の方法には、仏教は直接関与せず、祝宴も、場合によっては全く行なわれず、定式的なあいさつはない。

実際にそれが行なわれるのは、村の外であるが、村の人々あるいはその一部が参加するものとして、各種の会合（地区長会議、ヴィレッジ・スカウトの大会など）があり、その場合においても、それぞれの状況に応じて開会、閉会の辞、祝辞などの「あいさつ」が行なわれる。

以上述べた、公的・集団的な「あいさつ」の特徴を示す諸点は、以下のようにまとめられる。

- 1) 「あいさつ」の行なわれる「場」が所与のものであり、目的をもつものであること。
- 2) そこでは、地位、役割などが、既定的であり、「あいさつ」も、その定式に従うこと。
- 3) 身体表現ならびに言語表現の形式性が強調され、「あいさつ」がきわめて詩的な機能

を果たしていること²⁵⁾。

- 4) このような「あいさつ」が行なわれる「場」として新しいものも多く、またその規模も、都市文化の影響のために拡大する傾向にあること。

公的・集団的な「あいさつ」に対し、私的・個人的な「あいさつ」は、その形式、場ともに、きわめて多様であり、まさに日常のインターアクションのうちに生起する「あいさつ」といえる。

ここで問題となるのは、未知の人々に対する「あいさつ」と、既知の人々に対するそれとの区分である。通常、未知の人々とあいさつを交わす状況を考えると、まず何らかの所与の場で（儀礼、会合など）、第三者によって紹介される場合、第三者の紹介はなくとも、場そのものの仲介による「あいさつ」が行なわれる場合などの、いずれも「場」の共有および、その共有された「場」における各人の役割の分担、位置づけが定まっている場合がある。このような「あいさつ」は未知の人々の間のものでも、前述の公的・集団的な範疇に含まれる。所与の場においてではない、未知の人々の出会いが問題となるのは、ここでは村において、その出会いが行なわれる場合である。すなわち、街の中では通常、何も特別な出来事がなければ、未知の人と「あいさつ」を交わすことはない。村において、未知の人と村の人が出会うと、村人の側では相手が、その村の住人ではないことを確認しており、一方、外からやって来た未知の人は、自分がその村の住人でないことを知っている。この場合、「あいさつ」は、村外の人から始められるのが普通であり、定式的なあいさつ言葉とともに、その人が村へやって来た理由を示す説明や質問（たとえば、「村長に会いに来ましたが、彼の家は何处ですか？」）が行なわれる。

未知の外来者が、北タイ人でなければ（言葉でたいていは、すぐに察知される）、標準語にもとずいて、*sawatdii*²⁶⁾というあいさつ言葉と、ワイによって、あいさつが行なわれる。未知の相手が、同じ北タイ人である場合、前述の標準語にもとずくあいさつが行なわれる場合と、*jindii nuu*（「お会いできて嬉しい」の意）と言う場合とに大別される。後者の場合、ワイが行なわれるとき、そうでないときがある。同じ北タイ人でも、相手が街の人間であれば（服装などで判断される）、標準語的なあいさつが行なわれることが多い。これらのあいさつは、いずれもフォーマリティ²⁷⁾を含むものである。村人にとって未知である人と、出くわす機会は、それほど多くはない。とくに、北タイ以外から村を訪れる人は、何らかの所与の機会に参加するが多い。そのため、その出会いも、儀礼の場とか、会合の場に限定される。一方チェンマイ市から村を訪れる未知の人とは、県庁の役人、商人などである。県庁の役人の場合、郡役所の、村人に面識のある役人を案内人として、自動車で、直接村長の家を訪れるため、他の村人と道で出会ってあいさつをすることはほとんどない。また商人（とくに農業機械などのセールスマン）も、全く初めて来村するときには、直接村長の家を

訪れることが多い。

さて、既知の人々の間で交わされる「あいさつ」はどのようなものだろうか。村人にとって、既知の人々という場合、必ずしも一律な、あいさつの対象とはならない。つまり、面識があり、言葉を交わしたことがある相手でも、村の人々と日常体験を共有しない人々に対しては、すでに述べた未知の人々に対する「あいさつ」と、ほぼ同様のフォーマルな「あいさつ」が行なわれる。かなり、度々村を訪れる郡役所の上級官吏に対しても、顔見知りであっても、フォーマルな「あいさつ」が行なわれる。また、軽トラックで、灯油や魚醬あるいは、衣類、雑貨などを売りにくる、主としてチェンマイ市からの行商人に対しては、顔知りの親しさはあるものの、売り手と買い手との役割が明確に規定されているために、まず「何が欲しいか?」と「これを下さい」という会話が中心となり、積極的な「あいさつ」が行なわれることが少ない、未知、既知を問わず、日常体験を共有しない人との間で、所与の場でない、日常のインターアクションの中で行なわれる「あいさつ」に関して、いくつかの特徴をあげると以下ようになる。

- 1) 地位、役割に関しての所与の条件によって、「あいさつ」が規定されていること。
- 2) とくに未知の相手に対して、フォーマリティが強調されること。
- 3) 相手に関する話題 (other-oriented) あるいは自己に関する話題 (self-oriented) が、「あいさつ」のテーマになることは少なく、むしろ中立的な話題が、「あいさつ」としてとりあげられることが多い。
- 4) とくに未知の相手、あるいは既知でも、相手の地位によって、身体表現としてはワイが行なわれる。また言語表現としての、あいさつ言葉は、きわめて phatic である。

既知の間柄であり、かつ日常体験を共有する人々とは、まず第一に、同居している家族であり、隣人、同じ村に居住する他の人々を指す。そして近隣の同一タムボン内の他の村に居住する親族、友人知己、さらに遠隔の地に住む親族（近い親族であり、かつては同じタムボンないし村に居住した経験をもつもの）も含まれる。これらの人々の大部分は、毎日あるいは頻りに顔を合わせ、互いに名前を知っている関係にある。この範疇には、同一タムボン内の各ワットの僧も含まれる²⁸⁾。同じ村に居住する者同士は、どの個人を中心としても、その範囲は変わらないが、村の外、とくにやや離れた村や、タムボンを異にする年に居住する人々は、P村の村民各人によって、上述の範疇に相応する「あいさつ」を行なう対象になるかどうか不定である。すなわち、社会的距離にもとづく、この範疇は、家族、重層的な社会関係に結ばれた同一村内に住む人々を中心とし、同一タムボン内の他村の住民を、その周辺に、そして、別のタムボン、さらに遠隔の地に居住する親族知己を、その外縁として形造られている。

これらの人々の間では、日常のインターアクションにおける「あいさつ」のうちに、フォ

一マルな形は見出せない。ワイが行なわれることはなく、*sawatdii* や *jindii* というあいさつ言葉も用いられない。ワイ以外の顕著な身体表現もないために、これらの人々の間で行なわれる「あいさつ」は、あいさつ言葉としてとらえられる。それらのあいさつ言葉としては、以下のようなものが考えられる。すなわち、出会いの「あいさつ」として、*pai nai* (どこへ行きますか)、*nya yang* (何をしていますか)、*kin khaw kham yang* (オカズは何ですか)、*pai nai ma* (どこへ行って来ましたか)、*ma yang* (何んの用事で来ましたか)、*ma laew* (来たぞ)、*hoon* (暑い)、*naaw* (寒い)、*jien dii* (涼しい)、*fon tok nak* (すごい雨降りだ)、*fon ba tok luuy* (ちっとも雨が降らない)、*dai bo* (獲れたか)、*set leew kha* (終わったか)、*ma mua dai* (いつ戻ってきたか)、*ngaam* (きれい)、*loo* (ハンサム) などがある。そして別れの「あいさつ」としては、*pai koon nuu* (お先に) が圧倒的に用いられる。

これらの「あいさつ」は、すぐれて日常体験を共有する人々の間で用いられ、通常、その範囲外の人々との「あいさつ」には登場することがない。そのため、「あいさつ」の体系の相違により、一つのスピーチ・コミュニティが形成され、その範囲も明らかとなる。つまり、スピーチ・コミュニティの外側の人々に対しては、異なった「あいさつ」の体系が用いられる。

さて、それらの「あいさつ」を、前章で述べた、文型の基準にしたがい区分すると、疑問形と肯定形に大別される。一応ここで肯定形と考えられる「あいさつ」には、天候に関するもの(暑さ寒さ、雨への言及)、相手の顔の美しさ(男女の外見に関して)に関する言及、そして、到着と別れを示すもの(「来たぞ」、あるいは「着いたぞ」と「お先に」)が含まれる。天候に関する「あいさつ」は、話題として中立的であり、相互関係にある双方が、いずれも顕著な行為、動作の状態にない場合に行なわれる。すなわち、双方が、農作業に行く途中とか、一方は家の外を掃除しており、他方は、農作業に出かけるために、その家の前の道を通って行く状況が想定される。このような場合、家のまわりを掃除していることは、他人にとって自明のものであり、また農繁期に、いつもの時間に、いつもの畑や水田に、それに適しい恰好で出かけて行くことも、何んら特別の注目をひくことではない。そして双方に緊急の、あるいは特別の話題がなければ、天候に関するような、中立的な話題があいさつ言葉として選らばれる。天候に関する話題は、殆んどの場合、暑さ寒さと雨に集中し、晴れや曇りは問題にされない。また、「ゆうべはひどいどしゃ降りだったなあ。」というような、「あいさつ」の前傾性(過去への言及)もあまりみられず、もっぱら現前の気象現象が話題とされる傾向が強い。

相手の美しさに関する「あいさつ」は、同性の間よりも、異性の間で交わされる。この場合、双方とも適令期の男女であれば、言葉を先にかけるのは、男性である。女性から男性に

向かって直接、「ハンサム」と呼びかける場合、女性が年長であり、かつ既婚者であることが多い。あるいは、適令期をすぎた、既婚の中年の男女の場合には、女性の側からこの「あいさつ」が先に行なわれることもある。この「あいさつ」は、一つのスピーチ・コミュニティを形造る人々の間で、普く行なわれるものではなく、とくに関心の強い間柄で交わされる。このあいさつ言葉に対する応答は、「口がうまい。」とか「とんでもない。」とか、一応の否定を示すものである。このあいさつも、天候が「あいさつ」の話題とされる場合と同様、双方とも顕著な行為、動作を行っていない場合に用いられる。ただし、この場合話題そのものは、中立的ではなく、相手の状態に関与するものである。

つぎに、「あいさつ」が疑問形にあたる場合を考察することとする。村の道路で、人が出会う場合、しばしば *pai nai* (どこへ行きますか) という「あいさつ」が行なわれる。この「あいさつ」が行なわれるときにまず考えられるのは、一方が動いていて、他方が動いていない場合である。すなわち、一方が、道路を歩いており、もう一人は、家のヴェランダに坐っていたり、家のまわりにいる場合を想定してみればよい。そのときに、この「あいさつ」を始める側 (*initiator*) は、つねに動いていない(相対的に動きの小さい)側の人である。また、一方が家に居て、他方が家の前を通る場合に、必らずこの「あいさつ」が用いられるとは限らない。たとえば、家に居る側が、なにかめずらしい行為を行なっている場合、家の前を通る側が、*nya yang* (何をしていますか) と「あいさつ」を始めることもある。あるいは、道を通る人すべてに、この「あいさつ」が行なわれるのではない。この「あいさつ」が用いられる場合を検討すると、相手が動いていて、しかもその動きが顕著な場合である。ということは、道を歩いている人が、農作業に出かけるときや、放牧に牛をひきつれていくときより、野良着を着ていないで、小ざっぱりとした服装で、村の外へ行く場合に、この「あいさつ」が用いられることが多いことを示している。農作業や放牧、あるいは山に薪を採りに行くこと、魚を獲りに行くことは、村の日常生活におけるルーティーンであり、その場合には、それらの行動は格別きわだったものではなく、何処へ行くかは問題とされない傾向にある。ところが、同じ農作業に行くにしても、いつもと違う方向に行くことや、他の人々が農作業をしない時期に田畑に出かけて行くことは人々の注目を惹く。

この「あいさつ」が行なわれる別の場合として、双方が動いているという状況が考えられる。つまり、一本の道を正反対の方向から歩いて来て、互いにすれちがう際、あるいは、一方が後ろから相手に追いつき、追い越す場合が考えられる。正対して、それぞれの方向から歩いて来て出会う場合、「あいさつ」を始める人は、殆んど、動きの小さい側である。たとえば一方は、村の中で、ちょっと他の家を訪ねる途中で、他方は街へ行く途中である場合とか、あるいは、出合いが村の境界地帯で行なわれるときに、一方は他村の境域にある田畑で農作業を終え帰宅する途中、他方は、農具も持たず、村の境界を越えて出かけて行く途中の

場合を考えてみればよい。そこでは、村の境界を越えて出て行くことが、「あいさつ」を行なう際の重要な基準となっていることが了解される。しかも衣服や身に帯びた道具、あるいは徒歩であるか否か（自転車やオートバイに乗っているか）が重要な区分（行動の相対的な大きさ）を示す記号となっている。

出合いが正対して行なわれない場合には、「あいさつ」をめぐる事情は若干異なる。すなわち、正対しての出合いの場合、双方はほぼ同時に相手の姿をみとめ、近寄って言葉を交わす距離（大声でなく会話のできる距離）となって「あいさつ」を交わすが、一方が、他方の後方から接近し、追い抜く、あるいは並行する場合には状況が異なる。追い抜きが行なわれるとき（一方が歩いていて、他方が後方から自転車やオートバイで抜いて行く場合）には、後方から接近する側が相手より先に、相手の存在に気付くことが多い。そして前を行く人が気が付かなければ、そのまま追い抜いて行ってしまふこともある。その場合、追い抜かれた方が、先に行く相手に対し *pai nai* と「あいさつ」をすることがある。あるいは、追い越す側が、追い越される側に対して先に「あいさつ」を行なうこともある。追い越される側が、やはり村の外へ出掛けるときには、追い越す側（こちらも村外へ出掛ける場合でも）が先に *pai nai* とあいさつすることもある。まったく無言で追い越していつてしまうこともあるが、かりにオートバイの音がすれば、たいてい前を歩いている人もふり返って相手を認める。この場合も大てい、より行動量の大きい相手に対し、*pai nai* と問う傾向が強い。

これまで *pai nai* について論じた状況は、いずれも当事者双方が村内ないし、村の境界に位置している場合を対象としていた。しかし村人が、村の境域外で出会うこともある。たとえば他村、他のタムボンで、あるいはサンカムペンの街で、チェンマイ市内で会うことも、村外へ出かける機会が増すにつれ、頻繁なものとなっている。その場合にも、*pai nai* は「あいさつ」として用いられる。一方が、街中の茶店で小憩していたり、停留所でバスを待っている際に、他方がその眼前を移動中の場合には、ある一地点にとどまっている方が「あいさつ」を始める傾向が強い。あるいは、一方が先に乗り合い自動車に乗っていて、同じ村に住む人や、頻繁に往き来のある他村の人々があとから乗り込んでくると、先に乗っている側が *pai nai* と、あとから来た人にたずねることが多い。

以上のことから、この *pai nai* というあいさつ言葉は、多くの場合、静止している人、あるいは相対的に動きの小さい側から、動いている人、相対的に動きの大きい側に対して発せられるものであることが了解される。しかも、相対的に動きの小さい側というのは、何らかの画定された範囲に留まっているといえる。たとえば、村の道で二人の人が出会うとき、一方は村の中を出歩いていて、他方は村外へ出かける場合であれば、前者は村という一つの画定された境域に留まっており、後者はその境域から外へ出て行くと考えられる。あるいは、村外であっても、バス停や茶店など、固定した地点に留まる者が先に「あいさつ」を始める。

乗合自動車の例では、先に乗っていた側（一つの地点を先に占めている）が、その境域に入ってくる人に対して、「あいさつ」を始める。しかしながら、この場合双方とも、これから何処かに行くことは共通している。

pai nai という「あいさつ」が行なわれるすべての場合を通じて問題にされているのは、「行く」ことであり、それぞれの出会いが行なわれる場が、「あいさつ」を始める人と受ける人とを決定する原点（それに従い、動く側と動かない側を明らかにする）となるが、包括的には、一つの村の領域が究極的な準拠点となっている。すなわち村を出ることが、もっとも顕著に問題とされる。つまり「行く」行動の流れの方向は、村を中心として、周辺、街へと外側へ一方に向かう。他方、もう一方への移動の流れ（村→森、谷、山）は、街の方向への移動と比較すると、この「あいさつ」の顕著な対象となることが少ない。山や谷に、山菜や薪をとりに行くこと、あるいは狩猟に行くことは、日常生活のルーティーン²⁹⁾の一つとして考えられ、また薪をひろいに行く山や谷は、それぞれ村によって割り当てられているために、村里と山地の対比は、村と街との対比とは別のレベルのものとしてとらえられている。山に行く人々に対して *pai nai* という「あいさつ」が全く行なわれないのではないが、街の方向へ行く人に対して、この「あいさつ」が必ずずといって良い程用いられるのと著しい対比をなしている。山中で人が出会う場合に、特にこの「あいさつ」が用いられるのは、山菜や薪をとりに通常人々が行く範囲を越える場合や、普段全く山に行かない人が山中へ出かける場合である。

pai nai は疑問形で行なわれる「あいさつ」であるために、一応回答がなされる。但し、あくまでも「あいさつ」としての問いであることから、必ずしも厳密な回答が求められている訳ではない。この「あいさつ」に対し、大別して二つの答え方が示される。一つは、行先を具体的に述べる場合であり、*pai wiang*（チェンマイ市へ行きます）、*pai baan san*（サンカムペンの街へ行きます）、*pai baan A*（A村ないしA氏宅へ行きます）、*pai huay B*（B谷へ行きます）、*pay kin liang*（宴会へ行きます）などがそれに当たる。回答は、問いの性質上、殆んど行先に関するものである。

このように具体的な応答が行なわれず、抽象的な回答がなされる場合もある。*pai pun*（あっちへ行きます）という回答がその例で、その場合行先は特定されない。この回答は具体的でないという理由で、不十分なものとみなされることはない。というのは、「どこへ行きますか」というのは純然たる問いではなく、あくまで「あいさつ」だからである。あるいは、応答がまったく行なわれない場合もある。それは、互いに両者がオートバイに乗っていて瞬間的にすれ違う際などで、そのときには回答なしのことが多い。

pai nai ma（どこへ行ってきましたか。）という「あいさつ」もしばしば行なわれる。*pai nai* が、外へ（とくに村外へ）出かけて行く人に対する「あいさつ」とすれば、これは

外から「帰ってくる」人々に対して用いられる「あいさつ」である。これは帰ってくる人に対して用いられる「あいさつ」ではあるが、問いの中心は「行先」である。この「あいさつ」が行なわれるのは、*pai nai* の場合と同様、一方が動かない状態であり、他方が動いている状態の場合と、双方とも動いている場合とに大別される。いずれの場合にも、「あいさつ」をされる側が、何らかの形で「帰ってきた」者としての属性をもっていなければならない。「行く」と「帰る」を区分する基準はさまざまであるが、一つには、移動の方向によって、また時間帯によっても、相手が「行く」のか「帰る」のかが明らかになる。この「あいさつ」が行なわれる場合、「あいさつ」を始める側は、相対的に動きの小さい人である。そして、この「あいさつ」も *pai nai* と同様、村を基準として、外から帰ってくる人に対して用いられる。山に行き薪をとってきた人や、狩猟の帰途の人々に、あるいは田畑から帰ってくる人々にこの「あいさつ」が行なわれることは、きわめて稀である。それらはいずれも自明の行為であり、その場合、「あいさつ」に用いられる話題は別のもとなる。また、村の外へ行ってきたといっても、この場合、それは長期間の滞在ではなく、日帰りの範囲が問題とされる。もっとも典型的な場合、夕方村に帰ってくる人に対して、この「あいさつ」が用いられる。もし、ある人が、その人が出かけるときに会って、行先を尋ねていれば、夕方その人が村へ帰りつくときに、この「あいさつ」が行なわれることはない。*pai nai ma* とあいさつされるのは、「ここ」でない場所（当事者双方が出合っている場所以外）から、「ここ」に帰ってきた人に対してであり、原則として村が往来の原点とされる。しかし、サンカムベンやチェンマイ市の乗合自動車の発着場では、先に発着場に来て車を待っている人が、後から来た人に対し、*pai nai ma* とあいさつすることが見受けられる。この「あいさつ」の場合も一般的に、動きの小さい側が大きい側に問いかけることが「あいさつ」となっている。

この「あいさつ」に対する回答は、具体的に行先を述べる場合と、「あっち」に行ってきたと抽象的に答える二通りである。

つぎに *ma yang*（何んの用、あるいは何の用で来ましたか）があいさつ言葉として用いられる場合を考えてみよう。このあいさつ言葉は、まずもって、一軒の家を訪れた人に対して用いられる。この場合、「あいさつ」を始める側は、家にいる人で、家に向かってやって来る人に、早くから気付いていて、その人が、きわめて近い距離で正対する状況に入る前に、*ma yang* とあいさつする。訪問の約束がまえもってなされていたり、きわめて近しい間柄で日に数度も往き来があるような間柄の人に対して、この「あいさつ」が用いられることはない。むしろ、同じ村の人なら、普段それほどつきあいの緊密でない人、あるいは他村の人々に対して、この「あいさつ」が行なわれる。それに対する応答は、具体的な訪問の理由を述べることで示される。

nya yang (何をしていますのですか) は、他人の家を訪れる場合にも、他人が何か行っている傍を通り過ぎるときにも用いられる、あいさつ言葉である。ひとつの家を訪れる場合、訪問する側が必らず、この「あいさつ」を先に始める。とくに、その家の人が家のまわりで何か仕事をしていたり、家の中で何かしているときに、この「あいさつ」が用いられる。また通りがかりの人が、*nya yang* と尋ねることもあるが、その場合は、通りがかりの人は、ルーティーンを行なっている（農作業の往き帰りなど）ことが多く、しかも、相手を先に認めている場合である。いずれの場合も、一方が静止して何かを行なっている状況であり、路上で行き交う人々の間で、この「あいさつ」が用いられることはない。このあいさつ言葉は、必らずしも相手の行為が何であるか不明で見当のつかぬときのみ行なわれるのではない。とくに他人の家を訪問する際には、相手の行為が何であるか見当がついていても尋ねることがある。しかしながら、田植えをしている人に対して、通りがかりの人が「何をしていますのですか」と尋ねることはない。この場合、相手の行為はあまりにも自明であり、*dai khii hai* (もう何ライ済みましたか) など、別の形の問いかけを行なう。このあいさつ言葉は、相手の境域に入っていく場合（よその家を訪ねることなど）や、相手が何かしている近くを通りすぎるときに用いられ、「あいさつ」を始めるのは、つねに侵入する側の人である。そして通りがかる場合でも、その当人が街へ出かけるような顕著な行動はしていないのが普通である。

この「あいさつ」に対する応答には、牛車の修善をしているとか、ちまきを作っているとか、具体的な場合と、*ba nya yang sak yang* (何もしていない) という場合がある。「何もしていない」状態とは、ぼうーとしていたり、休息していたりする場合と、具体的に答えたくない場合とが考えられる。

よその家を訪問したり、あるいはその家の前を通りがかるときに、その家がちょうど食事中であると、*kin khaw kham yang* (オカズは何ですか) という「あいさつ」が行なわれる。あるいは、昼食時に水田の傍を通りかかって、そこで農作業をしている人々が、食事の際中であると、やはりこの「あいさつ」が行なわれる。それはまた、食後間もなく出会う場合にも用いられるあいさつ言葉である。食事が終わって長時間経過したのちに、この「あいさつ」がなされることはない。朝食後に会って何処かに一緒に出かける約束がある場合、二人の出会いは、まずこの「あいさつ」で始まる。この「あいさつ」への応答は、具体的なオカズの名称を述べることによって行なわれる。オカズが二種類以上の場合、一つだけ名称を言い、あと何種類あると述べることもある。この「あいさつ」は、オカズの内容に関する問いの形をとっているが、オカズの内容がすでに予測されていることも多い。たとえば、前の晩一緒にカエルとりに出かけていれば、翌朝の献立にカエルが登場することにはぼまちがいなし、タケノコの季節や青菜の季節には、どこの家でも大抵同じものを食べている。

また、この「あいさつ」は、求愛の会話の端緒として用いられる。現在、この求愛の伝統⁹⁰⁾は崩れつつあるが、北タイには、*ew saaw* と呼ばれる伝統的な求愛ないし、嫁選びの慣習があり、年頃の男性（15才位から）が、若い娘のいる家を訪れ、嫁さがしを行なう。夕食を済ませて、暗くなると、若者が娘の家を訪問し、娘に話しかけ、双方気が合えばその家にあがり込み夜更けまで話し込む。かつては、娘は夕食後、高床式の家の下で機織りをするが多かったので、そのまわりに若者が坐り、機織りを手伝いつつ話しをした。現在では、家庭での機織りは行なわれないため、若者は居間に上がり、刺繍などを行っている娘と歓談する。両親は大抵、奥の寝室に入り、若い者の邪魔をしないようにする。はじめは、一人の娘に対し、複数の男性が会うが、そのうちに気に入った同士のつきあいとなり、やがて結婚に進む。現在では、若い男女が知り合う場はさまざまであり（催し物や儀礼の場で、あるいは職場で）、必ずしもすべての結婚が、この方法にもとづくのではないが、村の若者は、夜になると、同じ村の中だけでなく、近隣の村々へと熱心に出かけて行く。この求愛の会話の端緒として、*kin khaw kham yang* というあいさつ言葉が用いられる。この「あいさつ」には探索的（exploratory）な要素が強く、応答によってその後のコミュニケーションの進展が決定される。というのは、「オカズは何ですか」に対し、「ナム・プリック」（もっとも一般的なオカズ）と答えた場合、女性は相手の男性に対し特別な恋愛感情や関心をもっておらず、「ゲン・バファク」と答えると、脈があると解釈される。この「あいさつ」は、*ew saaw* の場合必ず男によって始められる。女性は、その場合、実際の夕食のオカズの名を答えるとは限らない。

食事に関わる、もう一つの「あいさつ」は、*kin khaw laew kha*（もう食事は済みましたか）である。中国や朝鮮の事例⁹¹⁾としても、このあいさつは顕著なものと報告されているが、北タイでは、それほど頻繁に用いられることはない。これは食事時で、しかも食事が済んでいるかどうか不明であるときの「あいさつ」であり、よその家を訪問する場合は訪問者によって用いられ、また食事時にもかかわらず仕事をしていたり、村の中をぶらぶらしている人に対して、この「あいさつ」がなされる。

ma mua dai（いつ帰って来ましたか）は、村へ帰って来た人に対して用いられるあいさつ言葉である。しかしながら、このあいさつ言葉は、日帰りで村を出て、夕方村へ帰ってくる人に対してではなく（その場合 *pai nai ma* が用いられる）、出稼ぎで長期間村を離れている人や、チェンマイ市に寄宿して学校に通っている人が、しばらくの不在の後に村へ帰ってきたときに用いられる。村の成員以外でも、かつて村に長期間滞在したことのある人や、村の成員と結婚して村外に居住している人が、村を訪れると、やはりこのあいさつ言葉が用いられる。

これまでに述べたあいさつ言葉の他に、それぞれその場の状況に応じて用いられる、あい

さつ言葉がある。それらは、*pai nai* や *nya yang* など現前の行為を問う「あいさつ」とは異なり、むしろ「あいさつ」を行なう双方が顕著な行動を行なっていない場合に用いられる。たとえば、*dai bo* (とれましたか、上手くいきましたか) は、狩猟、魚とり、山菜採りから帰ってくる人、あるいは街へ農業融資の申し込みに行った人に対して問われる「あいさつ」である。その場合、相手の行為は既に周知のことであったり、あるいは、相手の姿を見て即座に判断できる (鉄砲をもって山の方角から帰ってくる) 場合であり、現前の行為が「あいさつ」の話題を引く引き金となるのではなく、既に行なわれた行為の結果についての問いが「あいさつ」になっている。*set leew kha* (もう済みましたか) も、仕事帰りの人 (農作業その他) に対し、仕事の進捗状態を尋ねる「あいさつ」である。また村の雑貨屋で買い物をして家に帰る途中の人に対して、*su yang* (何を買いましたか) と尋ねることもある。同じ買物でも、街へ出かけて帰ってきた人に、その「あいさつ」が行なわれることはなく、その場合まず何よりも先行が問題とされ、*pai nai ma* というあいさつ言葉が用いられる。さきに述べた、*kin khaw leew kha* もこの一群の「あいさつ」と同様のものと考えられる。

以上はいずれも出会いの「あいさつ」であるが、別れの「あいさつ」として *pai koon nuu* (お先に) がある。人と別れる際に、公的・集団的な場、あるいは私的・個人的な場であってもフォーマリティが強調される際には、出会いの場合と同様に、*sawat dii* というあいさつ言葉とワイが行なわれる。そして *phop kan mai* (また会いましょう) という「あいさつ」がつけ加えられる。これに対し、日常体験を共有する人々の間では、*pai koon* が用いられるのみであり、身体表現はみられない。*pai koon* は、現在行なわれている出会いの状況の場から離れて行く本人が述べる「あいさつ」であり、状況にかかわりなく、別れの「あいさつ」は、その場を離れる人によって始められる。この「あいさつ」に対する応答は、殆んど行なわれないが、稀に *uu hem nuu* (また話しましょう) が用いられる。

日常のインターアクションの状況で、日常経験を共有する人々の間に交わされる「あいさつ」の特徴は、以下のようにまとめられる。

- 1) あいさつ言葉は北タイ語として認識される。
- 2) スピーチ・コミュニティの対員の間で、これらの「あいさつ」が、年齢や地位による変異形をもつことはない³²⁾。
- 3) 身体表現は殆んど見うけられない。
- 4) フォーマリティが強調されることはない。
- 5) 「あいさつ」の話題はさまざまであるが、相手に関する話題 (結果的に相手に対する問いとなる) が多い。
- 6) 「あいさつ」を始める側と受ける側に、年齢や地位にもとづく原則はなく、動きの相

対的に大きい側に対する問いの形をとることが多い。

「あいさつ」に関してしばしば論じられる点は、出会った双方のどちらの側が先に「あいさつ」を始めるのかという問題である。日本の場合、通常、年長の者、地位の上のものに対し、そうでない側が先にあいさつすることが多い。また、「あいさつ」そのものが、そのような社会秩序にもとずき、それを再確認するために行なわれる傾向が強い。とくに、「あいさつ」の話題が天候など中立的な場合においてその傾向が強い。あるいは、相手より地位や年齢の低い側の人とは、相手に対して、他人志向的（other-oriented）な「あいさつ」（相手に対する問い）を行なうことは失礼に当たるとされるが、北タイの場合、相手が年長であろうと、地位が高かろうと、まず問題とされるのは、その場の状況に、より適切な「あいさつ」を行なうことである。したがって、相手が顕著な行動をしていれば、その行動を位置付ける問いが「あいさつ」となることが多い。

「あいさつ」の行なわれる場について考察すると、出会いの「あいさつ」の場合、次のようなことが明らかになる。出会いの場として、路上、田畑、ワット、家など、さまざまな場が考えられるが、いずれの場合にも、出会った双方のうちの一方が、その場に準拠しているとみなすことができる。すなわち、もっとも明らかな例として、家における出会いを検討してみればよい。よその家を訪れる際、その家の境域（通常垣根によって区切られている）は、その家の人々にとり、すぐれて拠り処として意味をもち、その空間の諸権利は彼らによって専有されている。このような空間に、他の人が入って行く場合の「あいさつ」は、通常入る側から始められる。とくに、家にいる側が相手の姿を先に認め、しかも訪問者が珍らしい存在で、訪問の意図がまったく不明である場合には、家にいる側から「あいさつ」が始められることもあるが、頻繁に往き来のある相手の場合、相手が家の境域に入ってくることに對し、すぐさまその意図を問うことは行なわれない。

べつの出会いの状況として、一方は家にいて、他方がその前の道を通る場合が考えられる。その場合、外の道を行く人が顕著な行動を行なっていれば、家の中にいる人が「あいさつ」を行なう傾向が強いが、外を行く人が、顕著な行動を行なっていない場合、互いに明確な形の認知（両者が物理的に近くに位置し、可視であること）が行なわなければ、「あいさつ」はなされない。つまり、一方が直接外から見にくい家の中にいたり、あるいは外を通る人々に背を向けているときには、自動的な出会いは行なわれない。しかしながらお互いに格別注目される行動をしていない場合でも、もし両者が認め合えば、その場の「あいさつ」は、多くの場合中立的な話題にもとずく。双方とも家を離れて村内の路上で出会う場合、その出会いの場は公的な空間で中立的であるが、どちらか一方が村を出ようとしていれば、村の領域が一つの準拠点となり、出て行く側に対する問いかけが「あいさつ」となる。逆の場合には、村の領域に入ってくる人（この場合村人およびスピーチ・コミュニティの成員を指す）に對

する問いかけ (*pai nai ma*) が「あいさつ」となる。双方とも、村内にとどまる状態で出会った場合、*pai nai* とか *pai nai ma* というあいさつ言葉は用いられず、天候に関して、あるいは互いの仕事に関する話題が、「あいさつ」として用いられる。その場合、「あいさつ」を始める側は、相対的に行動の小さい方である。すなわち、何らかの意味で行為の記号性をもつ人に対する問いかけが「あいさつ」となることが多い。村から外へ出ることは、もっとも顕著な記号として認識され、日常生活のルーティーンは記号として弱い意味をもつものといえよう。

さらに村から離れた領域での出会いにおいても、その出会いの場は、コミュニケーションを行なう双方にとって平等的な意味を有するものではない。さきに述べた乗合自動車での状況がその例であるし、市中のバス待合所もそうである。そこでは、その場に先に到着している人が後から来る人に対し問いかけを行ない、それが「あいさつ」の発端となる。

北タイのあいさつ言葉には、「お早よう」「今晚は」など一日の時間に準じて用いられる「あいさつ」は存在しない。その結果、「あいさつ」の話題は、天候、顔の美しゅうの他は、すべて相手の行動に対する問いと、別れの「あいさつ」に用いられる *pai koon* (お先に) と到着の際の *ma laew* に限られる。

このように「あいさつ」の大半が相手の行為に対する問いの形でおこなわれることから、移動している人、何か仕事をしている人、食事をしている人に対して、その内容を問い、相手を位置付けて行くことが「あいさつ」となるように思われる。ところで、他人の行為に関して問うことは、いわゆるプライバシーの侵害に結びつく危険があるが、この問いは厳密な回答を要求する純然たる問いではなく、回答の方法（あるいは無回答）により、あくまで「あいさつ」として位置付けられている。

さて、「あいさつ」が行なわれないことに対しての制裁はどうであろうか。こちらが「あいさつ」をしても応答しない人、あるいは「あいさつ」しない人は一般に *khon ba hu huang* (無知な人あるいは訳の分らない人) といわれ、まともに相手にならない人とみなされる。そして日常のコミュニケーションから疎外される。しかしこの疎外はコミュニティのすべての成員から一律に、共同体全体の規制という形で行なわれるのではなく、基本的には、個人的な形をとる。

一般に、人と人とが距離的に近接し、路上で会う際や、よその家を訪問する場合には、必らず「あいさつ」が行なわれるが、通常言葉を交わす距離よりも隔たりが大きい場合、互いに相手の姿を認めていたとしても「あいさつ」は行なわれない。手で合図することも行なわれない。だが、よほど関心のある相手や、めずらしい訪問者（久し振りに村を訪れた親族など）はその限りでない。一方のみが相手に気付いていて、他方は全く相手の存在に気が付かないときには、「あいさつ」が行なわれないことも多い。ただし、家の中から外を眺めてい

る人が、道を歩いて行く人（服装から判断して街へ行きそうである。）に気付くと、*pai nai* という「あいさつ」が行なわれる。その場合、道を通る人は相手に気付いていないこともある。すなわち、双方が相手に気付いていない場合でも、どちらかが、顕著な行動を行なっている相手を認めると「あいさつ」がなされる。逆の場合、つまり顕著な行為を行なっている側のみが、何もしていない相手に気が付いている場合は、「あいさつ」なしで、そのまま通りすぎるが多い。

「あいさつ」が行なわれない場合には、上述のように、当事者双方が相手の存在を認知しないために出会いが完全な形で成立しない場合のほかに、双方が敵対関係にある場合、あるいは短時間のうちに何度も出会う場合などが考えられる。後者の場合、はじめのうちは、出会う度毎に何らかの形で「あいさつ」が行なわれるが、度重なるにつれて特別に「あいさつ」を行なうことがなくなる。また、敵対している者同士が出会う際には、言語表現としての「あいさつ」は行なわれなくとも、パイと横を向くような意識的な「あいさつ」忌避の明示や、にらみつけたりして威嚇することが行なわれる。これらの意識的な無視や威嚇は「負」の「あいさつ」として位置付けられる。

「あいさつ」と空間、行為

前章で行なった、北タイのあいさつ言葉をめぐる分析により、日常のインターアクションの場で、日常体験を共有する人々が交わす「あいさつ」の大半は、行為と空間とに密接な関係をもっていることが明らかとなった。とくに、現前の行為に言及する「あいさつ」は、きわめて優勢であり、その場では、他の話題があいさつ言葉として選択されることはない。すなわち、村から外へ出かけて行く人と出会うときの「あいさつ」は *pai nai* であり、その他の「あいさつ」が行なわれることはまずない。また、食事をしている人々に出会うときには、*kin khaw kham yang* が、あいさつ言葉として圧倒的に使用される。このように、現前の行為に言及し、「あいさつ」の話題が規定的であるあいさつ言葉の例として、*pai nai*, *pai nai ma*, *nya yang*, *kin khaw kham yang*, *pai koon* などがあげられる。逆に考えると、これらの「あいさつ」は、その場の行為によって規定されているとも言えよう。これらの「あいさつ」が行なわれる出会いの場、そして *pai*（行く）によって示される移動という二点から、「あいさつ」と空間認識の関連について、あるいは、行為に関する言及（問い）が「あいさつ」となることから、「あいさつ」と行為の関連について、以下で検討を行なう。

北タイの人々が日常世界を認識する方法は、さまざまな基準にもとづくものであろうが、少なくとも空間認識の方法は、日常生活の現実の一端を具体的に示すものとして注目に値する。

生活空間のもっとも基礎的なものとして、家屋の構造を考えることができる。とりわけ、寝室 (*nai huan*) は重要な場所であり、家族以外のものはみだりに入ることが出来ない。

一つの寝室に、娘の両親と娘夫婦が同居する場合、東西軸により二分し、北側に両親が、南側に娘夫婦が寝る。北タイの方位観では、北と東が吉であり、優越している。仏壇の置かれる位置からもこれは明らかである。また家屋の中で寝室は居間や台所など他の部屋よりも一段高い床をもつ。未婚の娘を訪れた若者は居間か、あるいは大てい、ヴェランダまでしか入れない。但し葬式の際には、寝室に棺を安置し、会葬者は寝室に入ることができる。家の中に動物が入ってくることも嫌われる。どんなに可愛がっている犬猫でも、彼らの定位置は縁の下（高床の下）や屋外であり、入ってきたら即座に叩き出される。

殆んどの家は垣根で囲まれていて、その垣根の中の区域を保護する守護精霊の小社が設けられている。この精霊は、家屋敷内のみを守護し、婚礼、死亡、誕生など家族に変更がある場合、あるいは家畜を新たに買入れたとき、そして新年、建て前、仏教祝日などには、この精霊に対して、供物が捧げられる。一つの屋敷地に数戸の家屋（たいていは両親と娘夫婦の家）が存在する場合、それらの屋敷地の成員は *cao thii diaw kan*（守護精霊を共通とする）とか *hua diaw kan*（垣根を共にする）と呼ばれ一体感が強調される。また屋敷地に野生動物（キツネなど）が入ってくることは、その動物が本来あるべき位置を逸脱したこと从不吉とされる。あるいは、屋根にハゲタカやフクロウがとまっていることも同様に考えられる。家畜に関しても、よその家で飼っている牛や犬やニワトリが侵入してくると、人々は石を投げて追い払う。石が当たってニワトリが死んでも、他人の家の領域に侵入したのであるから、飼い主は文句を言えない。

家や屋敷地の領域を超える、村の領域は、村の守護霊（*puu baan, phii baan*）により守られている。村への新入者（家畜も含む）がある場合、この守護精霊への報告が義務付けられている。新年や仏教祝日など、カレンダーにもとずく儀礼の場合や、この守護精霊への集団儀礼の日には供物が捧げられる。村の若者が僧に得度する場合にも、この精霊への報告が必要とされる。村の境域は、屋敷地の区域空間ほど厳密ではないが、野山の動物が村に入ってくることはやはり不吉とみなされる。そして境界的な場所は悪霊（*phii raai*）の棲み処とも考えられている。事実、悪霊の大半は、村の境界のヤブの中や、水路の縁、大木などの周囲に出没するとされる。

それらの二つの空間（屋敷地と村）はともに精霊によって守護され、それらの精霊は社に祀られ、いわば *domesticate* されているが、山や森の境域は、無秩序な、野生の空間として、人間の能力を超えた存在が跳梁跋扈する空間と考えられている。そのため山野に出かける際には、食事時であれば、山の精霊に対して供物を捧げたり、とくに危険と思われる場所にさしかかると呪文（*khathaa*）を唱えて、呪護を行なう。

一方、都会（とくに明確に意識されるのはチェンマイ市）は、しばしば *wian* と呼ばれるように城壁に囲まれた街（現在でも城壁の一部は残存している）と考えられ、そこにはか

つて *cao* (王) が君臨し、街の守護霊が呪護する空間であった。また街の中心には、宇宙の中心を象徴するメル山を示す *saw inthakin* (国柱) が建てられていた。ところで、家、屋敷地、村、街と拡がる空間は、それぞれ一まとまりのものとして明確に画定されており、とくに家、屋敷地、村は、山野をも含めて一つの小宇宙を形造っている。農村では、里と山野は、人の住む処と精霊の棲む処として対比的に考えられているが、同じ人が住む処であっても、街はまったく別のカテゴリーに属する空間として認識されている。そのため、一つの空間から他の空間への移動は、たとえば他人の家屋敷に入ったり、村に入るときのように注意深く行なわれ、とりわけ、街へ行くことは、顕著な空間移動と考えられる。

他方、「あいさつ」をめぐる問題とされる、もう一つの事柄は行為である。すなわち、相手の行為が「あいさつ」を触発し、現前の行為を問うことが「あいさつ」となる。行くこと、何かを行なうこと、食事をすることは、「あいさつ」の話題として頻繁にとりあげられる。行くことは、空間の移動であり、顕著な行為として「あいさつ」の対象となることはすでに述べた。何かを行なっていることは、顕著な行為として、やはり「あいさつ」を発するための刺激となる。通常、食事は、食する人としての家族、調理されたオカズと主食(カウ・ヌン)から成立し、しかも食事という行為は、他の活動をはっきりと中断するものである⁸³⁾。そして日に三度食事がなされるように、きわめて日常的な出来事である。しかし、きわめて日常的でありながらも、日本でもしばしば言及されるように、「食事中お邪魔をして申し訳ありません。」と言わしめるような特別な場となる。

上述した行為は、それぞれ顕著であり、そのために、それらが「あいさつ」を触発すると言っても、顕著ということが、何か突飛な行為を表わしているのではない。ここで顕著と言う場合、それはあくまでも相対的にであり、日常的な行為の範囲を逸脱するものではない。つまり、農作業に行くことと対比して街へ出かけることはより顕著な行為であり、家の周囲をぶらつくことに較らべて、食事をするのがより顕著であると言っているにすぎない。

北タイ文化のコンテクストの中で行為という問題を考察する場合、必ずしも精密な概念規定を構築することにはつながらないが、以下のようなことが言えるだろう。行為というと、何かを行なうことであり、仕事をする (*nya ngaan*)、田植えをする (*nya naa*)、仏教儀礼を行なう (*tham bun*) など、いずれも *nya* あるいは *tham* という「行なう」の意をもつ動詞をともなう用語を思いうかべることができる。

行為と対蹠的な概念は非行為であり、それは「何もしていない」(*ba nya yang sak yang*) とか、「ぶらぶらしている」(*uu sui sui*) という用語で表明される。この非行為の範疇は *covert* であり、あくまでも、その場で問題とされる行為以外のものとして位置付けられる。くり返し述べたように、「あいさつ」の行なわれる状況では、たとえば路上で出会う当事者双方が、歩いてきて、ある地点で出会う場合、どちらの側も「歩く」という点では

行為を行なっている。だが、そこで焦点の当てられる行為が「街へ行く」ことである場合、他方の歩くという行為は、顕著なものではなく、非顕在的であり、相対的な非行為となる。そのため、「あいさつ」の状況では、つねに何らかの意味で、非行為者が行為者に対し、その行為の内容を問うという形で「あいさつ」が行なわれている。(もちろん、「あいさつ」は多様であり、すべての「あいさつ」に関してこの仮説が妥当するとは言えないが。)

このように北タイの「あいさつ」は、一つには、スピーチコミュニティの内と外において区分され、さらに、スピーチコミュニティ内部では、行為—非行為³⁴⁾の区分によって「あいさつ」が規定される可能性を示すものとして理解される。

そしてまた、「あいさつ」によって、しばしば行為の内容が問われる³⁵⁾ことは、「あいさつ」がつねに現前の状況を顕在化させるものである以上、行為と非行為という、日常世界の認識における重要な区分を提示しているのではないだろうか。

おわりに

多くの場合、「あいさつ」が行なわれることは、社会秩序の確認であり、「あいさつ」自体は、所与の条件に規定され、その状況下では当事者双方も既定的な役割をはたすことを期待されていると考えられている。たしかに、その側面を無視することは出来ないが、本稿での、ささやかな分析から言えることは、むしろ「あいさつ」そのものが、日常世界の認識を明らかにする可能性を提示し、人と人との出会いの状況で行なわれる「あいさつ」を検討することが、その背後に存在する諸観念を具体的なレベルで明らかにするのではないかという点である。

本稿での分析には、さまざまな問題点が、不十分なままのものとして残されており³⁶⁾、一層の洗練化が多くの点で必要と考えている。本稿における分析の試みを精緻なものとし、文化における問いの意味の追求をも含め、「あいさつ」の問題に関する、さらに巾広い展開を行なってゆきたいと思う。

謝辞

本稿の主題と関連した学会発表(第31回日本人類学会・日本民族学会連合大会、於早稲田大学、1977年10月29日)を行なった際に数人の方々から批評を戴いた。とりわけ井上兼行先生(独協大学)の適確かつ厳格な批判に感謝を捧げる。

また本稿を書くにあたり、青木保先生(大阪大学)は数々の示唆を教示された。菅野盾樹先生(大阪大学)からは「問い」に関して、西羽義夫先生(大阪大学)からは「行為」に関し

て貴重な教示を戴いた。ここに感謝を捧げたい。それらの御批判や御教示に対する十分な応答を行なうことは、今後の課題としたい。

<注>

- 1) Firth, R. 1972 1頁
- 2) 日常世界の定義は Schutz, A & Luckman, T. 1973 3頁にもとづく。すなわち彼は「充分な成人が、常識として当り前のこととみなすところの現実の領域」と述べている。しかしながら、この常識的な当り前の世界の実体は青木1972が述べるようにまるで判然としない。そのためここでは、文化による差異をみせながらも、普遍的に当り前のものとみなされる「あいさつ」の問題を手がかりに、日常世界の実体の理解を試みようとする。同時にそれは、「文化の記述」という観点から、単なるエキゾティックな異文化における出来事の記述にとどまらず、文化人類学的方法を現代社会に適用する可能性を示すものと言えよう。だが本稿の分析は、この意図を十全に実現しているわけではなく、あくまで可能性の糸口を提示するにすぎない。
- 3) 「あいさつ」の人類学的研究は、古くは、Tylor, E.B. 1878 などに見ることができる。その場合、「あいさつ」の言語表現よりも身体表現に研究の力点が置かれ、事例も、王に対する「あいさつ」のように、いわゆるフォーマルな儀礼的「あいさつ」に言及されたものが多い。その後、Malinowski, B. は、言語の直話的機能の問題をとりあげて (Malinowski, B. 1923), 「話すことによる一体化」(すなわち、未開社会において、彼らにとっては出会った相手が口をきかないことが、どんなに不安をもたらすかということに触れ、「あいさつ」を行なうことは、言語表現を媒介として、何かを伝達するのではなく、人と人とを共通の場にひき入れ、円滑な関係を設定すること) について論じている。つづいて、Birdwhistell, R. 1952 などによるキネシクスの分野、あるいは、動物行動学の影響のもとに、Hall, E.T. 1959, 1966は、文化における非言語行為について論じ、出会いの状況をめぐる個体間の距離に関する人類学的研究を行なった。また Goffman, E. は、小規模集団や、精神分析療法における施療者と患者との関係から人と人との出会いに関するすぐれた業績を発表している。(Goffman, E. 1964, 1971など) さらにエスノメソドロジーや、社会言語学により、社会的なコンテクストにおける言語研究 (たとえば Hymes, D. 1964, Gumperz, J.J. 1970, Labov, W. 1970) の進展が行なわれ、会話の分析、コミュニケーションの民族誌的研究が現在ではさかんになっている (Bauman, R. & Sherzer, J. 1974など)。これらの社会言語学的研究にもとづく「あいさつ」の研究として Irvine, J. 1974や Laver, J. 1975がある。しかしこれらの社会言語学の影響を受けた、小規模社会あるいは小状況におけるコミュニケーションの人類学的研究に対し、Leach, E. R. は、それらの状況設定が、文化の全体との関連からきわめて恣意的であること、それらの小状況 (たとえば会話) の分析から明らかになるものと、大状況 (世界観) との関係を位置付ける際の不明晰性について、厳しい批判を行なっている (Leach, E. R. 1976) 日本では、柳田国男 (昭和19年)、そして鈴木孝夫 (1968年) が、「あいさつ」の問題に触れているが、青木保 (1972年) は注目に値する問題提起を行なっている。
- 4) 北タイの村における私の体験からも、「あいさつ」の問題は、単に理論的な関心というだけでなく、一つの日常生活の経験としての重みをもつものといえる。村に住み始めた当初は、バンコクで習い覚えた、いわゆる標準語にもとづく、あいさつ言葉とワイ (合掌) を用いて「あいさつ」を行なっていた。それに対し、村の人々も、同じ流儀のあいさつを返してくれていたが、そのうちに、村の人々同士の間では、それとはまったく異なる方法で「あいさつ」が行なわれていることに気付いた。それとともに、私に対しても、しばらくすると、北タイ流の「あいさつ」がなされるようになった。この「あいさつ」の受け応えは、字句上の意味からは理解できるとしても、あいさつとしての意味の理解が行き届かず、なかなか円滑に応答することができなかった。道で村の人と出会うと、「どこに行くのですか」としばしば訊ねられる (「あいさつ」される) ことが多く、その度毎に、それが「あいさつ」であると理解していても、プライベートを侵害されているような気持がして、いくばくかのわずらわしさを感じていた。結局は、その場合、私が習い覚えた、村の人々同士の間で用いられる、「あいさつ」の方法にしたがって応答をするのだが、いつも何かしらタイミングがずれているように感じていた。それはもちろん言語 (北タイ語) に不慣れであったことにもよるが、単にそれだけではなく、むしろ文化を異にする「あいさつ」の方法自体への無理解によるものであった。調査地に滞在しているうちに、これらのとまどいや、わずらわしさは急速に減少して行き、円滑に「あいさつ」ができるようになった。とともに、必ずしも十全ではなくとも、北タイの一

社会への参与が行なわれつつあるという実感が多少とも得られるようになった。

- 5) 社会秩序、社会現象にアプローチする方法を“normative”と“interpretive”との二つに大別することができると Wilson は述べている (Wilson, T. 1970 59-79頁。この文献は Bilmes, J. 1976 によって教えられた。)。それによると、Parsons は「人間の社会的行動の構造は、規律、価値、そしてその他の規範的要素など、つまり内在化され、制度化された規範的な文化の型式から成り立っている。」と言う。(Parsons, T. 1968 375頁)。一方、“interpretive”な方法においては、ある状況の性格、およびその状況の下に行なわれる行為の性格、とりもなおさず、その場合に適用される規範の性格、そしてその適用を設定するものの性格は、解釈や理解に対して開かれたものとなっているとする。(たとえば、このアプローチを行なう代表者として Garffinkel, H. があげられている。)。結局、これら二つの方法のもっとも重要な差異とは、規範的アプローチにおいては、規範を知っていることが、行為を説明したり予測したりするための十分条件であり、解釈的アプローチにおいては、そうでないという点である。

この問題をふまえたうえで、本稿では、あくまで、日常の小状況を、確かな現実として分析の出発点としてゆく。だがこの問題に関する、より明確な検討は、私にとって今後の課題として残されている。

- 6) 人類学的タイ研究は Embree が述べた「弛緩した構造」という、タイの社会構造に関する分析のパラダイムに大きく左右されてきた (Embree, J.F. 1950)。彼の論点は、あくまで相対的、比較的(とくに日本社会との)なもので、その点では妥当と思われる。ところが、彼の論点は、おそらく本人の予想以上に議論を呼び、社会構造の「弛緩性」が相対的な位置付けの範囲を超えて、タイ社会の固有性を示すものとして引用され、扱われたために、その後数多くの批判の対象となった (Evers, H.-D. 1966, Pofar, J. 1976など)。しかし、それらの批判は、いずれも、制度、組織は決して弛緩していないという点で共通しており(構造の問題としてではなく、程度の問題として論じられている)、Embree のパラダイムに対する正面からの批判になっているとは思えない。
- 7) バーガーとルックマンは次のように言う。「日常生活の現実¹⁾は現実として自明視されている。それはその単なる存在以上になんら補足的な検証を要しない、それは自明で強制的な事実性として、端的にそこに存在する。私はそれが現実的であることを知っている。この現実について疑ってみることは不可能ではない。しかし、日常生活のなかで決まりきった生き方をしているかぎり、私はそうした疑いを停止することを余儀なくされる。こうした疑いの停止は極めて堅固なものであり、そうした態度を捨て去るには——たとえば私が理論的ないしは宗教的な瞑想によってそれを捨て去りたいと思うときには——極端な視座の転換が必要になる。」(バーガー、ルックマン、訳書39-40頁)つづいて、「しかしながら、日常的な現実の没問題な部門でさえも、それが没問題であり得るのは、注目すべき新事態が出現するまでの間だけ、つまり、問題の出現によって日常的な現実の連続性が断ち切られることのないかぎりにおいて、というだけにすぎない。」(前掲書41頁)と述べている。またこの問題に関して青木は、「常識の世界は、いわばそれが「常識」であり、そこにおける「道徳秩序」がすでに目にみえなくなっているがゆえに、それを客観的にとらえることは日常性に埋没した状態では困難であり、それが「みえる」ためにはある種の「異化作用」が必要である。それは人類学者が認識作用として「異文化」の記述において採用している方法に関連する。……」(青木1972 5月号63頁)と述べている。
- 8) この実地調査は、1975年から1977年の2年間、文部省アジア諸国派遣留学生として筆者がタイ国に滞在した際に行なわれた。
- 9) タイ国の行政組織は、村 (muubaan)、地区 (tambon)、郡 (amphuu)、県 (cangwat) に区分されている。
- 10) タイ語では luuk sua (虎の子) と呼ばれ、国王の提唱により発足した組織で、地方農民の組織化をめざし、ボーイ・スカウト的な役割をはたしている。ただし、1976年政変の際に、これらの団体が、学生運動抑圧の一翼を担ったことは記憶に新しい。
- 11) 一般にタイの農村は閉鎖的な社会ではないといわれ、通常、村の一体感がこたさ強調されることはない。しかし khon baan haw (自分の村の人々) とそうでない人との区分はあり、他村との共同で行なう儀礼や催し物の際には、村同士がはり合う。また若者同士の喧嘩により、村々が敵対することもめずらしくない。
- 12) mu fai と呼ばれる灌漑グループは、一つの河川を水源として共有する集団であり、その組織は数カ村に拡がる。水路の補修、取水の時期などが、各村に応じて取り決められる。
- 13) 都市居住者が自分の郷里あるいは何らかのつながりのある寺院の儀礼に参加して寄進を行なうこと

- は最近きわめてさかんに行なわれている。多くの場合、都市からの参加は団体（職場グループなど）で行なわれ、週末を利用して、儀礼への参加と観光旅行とを兼ねている。
- 14) この問題に関しては、Davis, R. 1974年にくわしい。街を原点とすると、村は外側のものと認識され、山はさらに離れた空間として考えられている。ところが村を原点にすると、山は、より内側の空間として位置付けられる。このように、空間認識の問題として、村と山は一つの体系をなし、街は別の範疇として考えられている。
 - 15) 一般的には北タイ方言と位置付けられるが、北タイ人の認識では、北タイ語とされる。北タイ人は自らを北タイ人 (*khon muang*, 王国の住人) と認識し、他のタイ人（とくに中部タイ人）を *khon thai* (タイ人) と呼ぶ。いわゆる北タイ人は、北タイ語を話すタイ語族の一員で現在は、約300万の人口をもち、言語、文化の面で、他地方との接触により崩れつつはあるが、伝統的な一体性を保持している。
 - 16) 義務教育は、調査当時、農村部では初等教育四年間であった。
 - 17) 伝統的な芸芸としての *soo* (一種の音楽つきのかけあい漫才)、その他の語りの伝統 (*khaw*) などに、言語遊びと即興性が顕著にみられる。
 - 18) ここでいう沈黙とは単に物理的に音のない状態を指す。
 - 19) 「あいさつ」は、境界的な状況、移行にかかわる状況で行なわれることと、きわめて形式化された行動であるために、儀礼として位置づけることができる (Firth, R. 1972, Laver, J. 1975 参照)。儀礼の定義としては、Leach, E.R. が次のように述べている。すなわち、人間の行動を、(1)特定の目的をもち、我々の判断基準からみて、厳密に機械的な方法で、目にみえる結果をつくり出す行動。それを我々は合理的・技術的行動と呼ぶ。(2)手段と結果の間の機械的な連関によってではなく、文化的に規定されたコードの存在によって、情報伝達の役割をはたし、記号体系の一部を形成する行動。(3)行為者が認識する文化的な装置、習俗として力をもち、合理的・技術的な観点からは全く無力な行動。あるいは、その行動自体は何んの力をもっていないくても、神秘的な力をひき出すために行なわれる行動。つまり呪術的な行動といえるもの。(Leach, E.R. 1972) の三つに分類し、そのうち(2)と(3)を儀礼的行動として位置付ける。これは、簡潔にして要を得ており、儀礼をいわゆる宗教的儀礼にのみ限定しないという利点をもつ。さらに Leach は、「人類学者が儀礼を論ずる場合、彼らはつねに、非言語行為のことをまず考えている。だから私の同僚の人類学者達に、スピーチそのものが儀礼の一つの形式であり、非言語儀礼は、別の、あまり特殊化されていない種類の記号体系にすぎないことを、思いおこさせるのは価値がある。」と言っている (Leach, E.R. 1972 334-335頁)
 - 20) 言語の詩的機能とは、言語が、その意味するもの自体である作用を行なう機能のことで、そこでは、意味するものと、意味されるものが一体化されている。たとえば葬儀の席で「ご愁傷さま」という場合がその例となる。Jakobson 参照のこと。
 - 21) さきに注3, Malinowski に関する叙述で触れたように、言語の直話的機能を指す。すなわち、言葉自体としては、ほとんど意味をもたない、あるいは情報伝達の機能をはたさない言語表現がはたす機能のこと。
 - 22) スピーチコミュニティとは、ここでは、ある一つのスピーチの体系を共有する集団と定義しておく。この問題に関する一つのまとまった紹介として、Bauman, R. & Sherzer, J. 1975がある。
 - 23) 北タイにおける「あいさつ」の記述は、科学的ではなく、経験的である。また、他人同士のコミュニケーションに注意を払ってはいても、資料の中心としては、調査者本人が参与したコミュニケーションの状況が大きな位置を占める。その意味で、この分析には十全といえない部分が多々存在する。
 - 24) ここで顕在的な儀礼という場合、それは一般に宗教儀礼を指す。すなわちそれは、Leach の分類にしたがえば、主として(3)の範囲にあたる。北タイでは、これら儀礼、会合は *ngaan, kaan* (いずれも行事を示す) と呼ばれている。
 - 25) これらの場での「あいさつ」には、いわゆる絞切り型のあいさつ言葉、言語表現が頻繁に使用される。大てい、このような「あいさつ」は、「この佳き日に……」で始まり「皆さんの御健勝を祈ります。」で終わる。このようなスピーチの型式は、タイ全土できわめて普遍的である。
 - 26) 標準語のフォーマルなあいさつである。字句上の意味は相手の安寧を祈ることである。
 - 27) ここでフォーマリティというの、言語的には、*kham supaab* (丁寧語) を指し、北タイにおいて、それはとりもなおさず標準語を意味する。また身体表現としてのワイもフォーマリティを示すとも考えられている。

- 28) 日常、僧に対しては *pai nai* や *nya yang* という「あいさつ」が行なわれ、路上で出会う場合にも格別のフォーマリティが示されることはない。ただし僧に対して *kin khaw kham yang* (オカズは何ですか) という「あいさつ」は決してなされない。一般に僧は聖なる存在であり、食物は僧との交渉で直接話題とされない。一つの「あいさつ」の体系から考察すると、僧は、パーリ語によって象徴されるフォーマルな僧集団を形成しており、とくに儀礼の場で示される独自の「あいさつ」体系をもっており、一般人とは別のカテゴリーに属するが、日常的な場でのインターアクションにおいては、やや両義的である。
- 29) 北タイ農村のコンテクストにおいて、農作業、山へ狩猟に行くことはルーティンとして位置付けられる。街へ出かけることも現象としては、近頃かなり頻繁になりつつある。しかし毎日市場へ買出しに行く人でも、必ずしも他所行きの衣服を身につけて行くことから、これら二つの行動には差があるものと了解される。
- 30) この伝統的な *ew saaw* については、Wijeyewardene, G. 1968によって論ぜられている。
- 31) たとえば中国の事例として、Yang, M.C. 1947の報告がある。しかし何故、食事に関する問いが「あいさつ」となるのかについての適確な説明は行なわれていない。
- 32) 「あいさつ」と年令、地位との連関を検討した論考として Geertz, C. 1972がある。しかし北タイの場合、「あいさつ」によって地位や年令、世代などに関する原理が顕在化されたり、あるいは「あいさつ」がそれらの原理にもとづくという、両者の関連性は見出し得ない。
- 33) 本稿では、社会的出来事としての食事の位置付けは十分に行なわれていない。この部分の叙述は、Frake, C.O. 1964にもとずいている。
- 34) 行為・非行為の区分、およびそれぞれの概念に対する検討はこれからの課題である。とくに北タイ文化のコンテクストにおいて行為、静、動といった概念が、現実の日常生活においてどのように認識されているかを探求しなくてはならない。
- 35) 「問い」あるいは質問、疑問の問題も未解決のままに残されている。人類学における問いの問題は、フィールドワークにおける質問の問題も含めて今後検討してゆきたい。
- 36) Frake は次のように語っている (Frake, C.O. 1964)。「民族誌の叙述の定式化は、少なくとも次の作業を含んでいるように思える。
- 一、その文化の「場面、や出来事」の主な築構を発見していくこと。
 - 二、〔舞台〕場面を定義する。つまり、観察された相互交渉・行為・対象・場所が、役割・ルーティン・装置・〔舞台〕情景として適当な〔舞台〕場面に割りつけられるように、それを定義すること。」
 - 三、場面相互に関してそれらの分布を述べる、すなわち、場面をくむための指針となる知識を備えておくこと。」
- 本稿での分析が、このような条件をはたしているかどうか問題は大きく残されている。

参 考 文 献

- 青木保1972「現代日常生活批判」、『中央公論』5月号6月号所収 東京。
- Bauman, R. & Sherzer, J. (eds) 1974, *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge University Press.
- Bauman, R. & Sherzer, J. (eds) 1975, *The Ethnography of speaking*, in *Annual Review of Anthropology*, Vol. 4, Stanford University.
- Berger, P.L. & Luckman, T., 1966, *The Social Construction of Reality-A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York. (山口節郎訳『日常世界の構成』昭和52年 新曜社)
- Bilmes, J., 1976, Rules and Rhetoric: Negotiating the Social Order in a Thai Village, *Journal of Anthropological Research* Vol. 32.
- Birdwhistell, R., 1952, *Introduction to Kinesics*, University of Louisville Press.
- Cicourel, A.V., 1973, *Cognitive Sociology*, Penguin Education
- Davis, R., 1974, Tolerance and Intolerance of Ambiguity in Northern Thai Myth and Ritual, *Ethnology* Vol. 13
- Embree, J.F. 1950 Thailand-A Loosely Structured Social System, *American Anthropologist* April-June,
- Evers, Hans-Dieter (ed.) 1969 *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective*, Southeast Asia Studies Cultural Report Series No. 17, Yale University.

- Firth, R. 1972 Verbal and bodily rituals of greeng and parting, in La Fontaine, J.S. (ed.) *The Interpretation of Ritual*, London.
- Frake, C.O. 1969 A Structural Description of Subanun "Religious Behavior" in Tyler, S.A. (ed.) *Cognitive Anthropology*, Mew York, (From Goodenough, W.H. (ed.) *Explorations in Cultural Anthropology* 1964 New York.) (宮坂敬造訳「文化の構造的記述」『現代思想』1976年3月号所収)
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in ethnomethodology*, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Geertz, C. 1972 Linguistic Etiquette, in Pride, J.B. & Holmes, J. (eds) *Sociolinguistics*, Penguin Education (From Geertz, C. 1960 *The Religion of Java*. New York)
- Goffman, E., 1964 The Neglected Situation, *American Anthropologist*, Vol. 66 No. 6 Part 2.
- Goffman, E., 1971 *Relations in Public*, New York
- Gumperz, J. 1968, The Speech Community, in *International Encyclopedia of the Social Sciences*,
- Gumperz, J. 1970, Sociolinguistics and Communication in Small Groups, in Pride, J.B. & Holmes, J. (eds) *Sociolinguistics*, Penguin Education
- Hall, T. E. 1959 *The Silent Language*, New York (国弘正雄他訳『沈黙の言語』1966年 南雲堂)
- Hall, T. E. 1966 *The Hidden Dimension*, New York (日高敏隆他訳『かくれた次元』1970年 みすず書房)
- Hymes, D. 1964 Introduction: Toward ethnographies of communication, *American Anthropologist*, Vol. 66 No. 6
- Irvine, J. T. 1974 Strategies of Status Manipulation in the Wolof Greeting, in Bauman, R. & Sherzer, J. (eds) *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge University Press.
- Jakobson, R. 1960 Linguistics and poetics, in Sebeok, T. (ed.) *Style in language*, Mass.
- Labov, W. 1970 The Study of Language in its Social Context, in Giglioli, P.P. (ed.) *Language and Social Context*, Penguin Education.
- Laver, J. 1975 Communicative Functions of Phatic Communion, in Kendon, A. et al. (eds) *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, (World Anthropology), The Hague
- Leach, E.R. 1972 Ritualization in Man in Relation to Conceptual and Social Development, in Lessa, W. & Vogt, E. Z. (eds) *Readers in Comparative Religion: An Anthropological Approach* (From Huxley, Sir Julian (ed.) *Philosophical Transaction of Royal Society*, 1966)
- Leach, E.R. 1976 Social Geography and Linguistic Performance, *Semiotica* Vol. 16. No. 1
- Malinowski, B. 1973 The Problem of Meaning in Primitive Languages, Supplement to Ogden, C.K. & Richards, I. A. *The Meaning of Meaning*, London (First Edition 1923)
- 三木 清 1966「問の構造」『三木清全集』第三卷所収 岩波書店 (『哲学研究』第124, 128号大正15年9月, 昭和2年1月号より)
- Parsons, T. 1968 Order as a sociological problem, in Kuntz, P.G. (ed.) *The Concept of Order*, University of Washington Press, Seattle.
- Potter, J.M. 1976 *Thai Peasant Social Structure*, Chicago.
- Rajadon, P. A. 1972 *Thai Traditional Salutation*, Thai Culture New Series No. 14, The Fine Arts Department, Bangkok
- Schutz, A. & Luckman, T. 1974 *The Structure of the Life-World*, London.
- 鈴木孝夫 1975『ことばと社会』中央公論社.
- Taylor, E.B. 1878 *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*, London,
- Wijewardene, G. 1968 The Language of Courtship in Chiangmai, *Journal of Siam Society*. Vol. 56 No. 1, Bangkok.
- Wilson, T. 1970 Normative and interpretive paradigms in sociology, in Douglas, J. D. (ed.) *Understanding everyday life*, Chicago.
- 柳田国男 1977『毎日の言葉』(第19版) 角川書店 (『民間伝承』10巻3号・4号・5号昭和19年3・4・5月より)
- Yang, M.C. 1947 *A Chinese Village: Taitou, Shantung Province*, London

Ethnography of Greeting

—An Analysis of Greeting Words

KAGEAKI KAJIWARA

This is a preliminary essay on the ethnography of greeting within everyday social encounters. It is based upon data obtained in the course of field research in a Northern Thai village, from January 1976 to January 1977.

In this essay, I am devoting my analysis to the discussion of verbal aspect of greeting, essentially. Because, there is scarce bodily expression in Northern Thai mode of greeting. Since the village with its environ forms a speech community, there are two ways of greeting. One with people outside of that speech community is characterized by formality, ie. use of Central Thai language or formal Northern Thai and that of fold palms (*wai*). Another with those who are members of that speech community is marked by informality, ie. use of indigenous Northern Thai and scarce bodily expression. I choose the latter for the object of analysis, here. Because, I try to depict the feature of wider cognitive frameworks in a Northern Thai village through a scrutinization of greeting behavior. Behind the analysis in this essay, I have an intention to pursue the applicability of analysis of one momentary microcosm (ie. interaction situation, greeting) to a proper understanding of wider social macrocosm (ie. social cognitive frameworks). I also might prove the feasibility of a sound contribution to the study of Thai culture, to certain extent. I say this because the study of Thai social structure inclines unreasonably toward that of social organization and social groups. It is remarkable to find the lack of attention to the contemplation in the structure of Common-sense World.

Examining everyday social interactions, we might notice regularities which determine greetings. In public space (road), the initiator of greeting is a person who is inactive relatively. Let us imagine a situation in which two persons are coming across on a road. If one participant in the encounter is just strolling in the village or is going to go routine work and another is going to go to town in his best clothe, the former is the initiator. In private space (house, house compound which is demarcated with fences from public space), a person coming into other's private space is the initiator. In both cases, the major topic of greeting words is about relatively marked action in sight, here and now. If one notice a relatively marked action in sight (going to outside of the village, coming into the village from outside in public space encounter, and eating meal, doing something in private space encounter), other greeting words, for example comments on weather, are not used definitely. As to linguistic form of greetings, those concerned to actions are questions. So, we may say, in Northern Thai everyday situation, greeting

means to identify actions of others through asking questions ('Where are you going?', 'What are you eating?', 'What are you doing?' and etc.). But these are questions only literally. Semantically, those are not questions but greetings.

The arrangement of this essay looks first at the village social and cognitive setting, then around the general concept of greeting, then the analysis of Northern Thai greeting words and then illuminate the relationship among greeting, space and action.